y@maの家（うち）

さいいん

ごあいさつ

— Top Message —

機関誌リニューアル第２弾！

やっと、第２弾の発行となりました。

前回のリニューアルから、ずいぶんと日が経ってしまいました。

早くに取材でご協力いただいた皆様には、申し訳ありませんでした。

今回は、「本×居場所」というテーマで取り組みました。

きっかけは、「認知症にやさしい図書館」というプロジェクトに出会ったから。

最初は何のことか分からなかったけど、図書館は高齢者の方がまちの“居場所”として利用されることが多いとか。

当施設のご利用者も本好きの方が多くおられます。

そして、職員にも。

そういう生活の中に身近にある「本」を切り口にした”居場所“について取り上げてみることにしました。

そうしたら、身近な地域にある”居場所“から京都市内全域まで、様々な場や取組があることを知りました。

今回の記事を読んでいただいて、新たな“居場所”の発掘や取組に関心をもっていただければ幸いです。

「所長と星のイヤリング」

高齢者福祉施設　西院

所長　河本歩美

特　集

本×居場所

目　次

◆表紙の絵：デコボコ色いろ版画
臨床美術作品

所長の挨拶　2

認知症に理解の深いまちづくり　3

右京中央図書館　5

多世代交流食堂×読み聞かせ　7

このはな文庫　9

只本屋　11

往復書簡　13

BOOK AND BED　15

社長インタビュー　17

認知症に理解の深いまちづくり。

まずは認知症のこと、きちんと知ってもらう…「図書館」と協力して

小川 敬之 氏

（九州保健福祉大学　作業療法学科 教授）

1985年 九州リハビリテーション大学校作業療法学科卒業。日本赤十字病院、日本赤十字社特別養護老人ホーム勤務を経て、2000年より九州保健福祉大学保健科学部作業療法学科にて教鞭をとる。現在は、九州保健福祉大学保健科学部作業療法学科教授として勤務。

話の始まりは約2年ほど前の事。東京有楽町の貸し会議室でDFJI（Dementia Friendly Japan Initiative）※1のメンバーである富士通株式会社の岡田誠氏、コクヨ株式会社田中克明氏との何気ない会話からでした。

イギリスではDementia Friendlyをキーワードに様々なセクターからなるネットワークづくり（DAA：Dementia Action Alliance）が盛んに行われており、それぞれのセクターが独自の取り組みを展開しているとのこと。その一つであるプリマス市中央図書館の「認知症の人にもやさしい図書館」の取り組みの紹介があり、日本ではあまり取り組みを聞かないし、「福祉大学の特性を活かし、大学の図書館に認知症の人にもやさしいコーナーを作ってみて、様子をみてはどうだろう」と案外軽い会話だったように記憶しています。それまで様々な分野で認知症に関するお話をさせてもらう機会に恵まれ、その都度身をもって感じていたことそれは「認知症の大きな課題は認知症のことをきちんと知らない事。知らないが故に蓋をして遠ざけてしまうことも多いのではないか」ということでした。多くの人にきちんと知ってもらう手段は何かないか、講演会など認知症の医療、ケアに関わっている方々だけではなく、一般の方々にも知ってもらう仕掛けは無いものだろうか、と考えている矢先の事でした。私の頭の中の電球に明かりがピカーンと灯り「これだ！」と感じた瞬間でした。

その後すぐに大学図書委員会への提案、教授会を経て、図書館の一角に「認知症コーナー」を設置させてもらったのが初めの一歩です。（写真1）

（写真1）大学図書館にゼミ生と一緒に設置

大学での試行を参考に、今度は地域展開を計画し、私が所属する日向市（宮崎県）認知症支援推進委員会（市、医師会、市民、医療従事者、福祉専門職、教育委員会、有識者などから組織。委員会は市の認知症問題を考え、解決するための提案を行っている組織）で図書館との連携による認知症啓発と地域包括ケアシステム構築を見据えた社会資源としての図書館の協力を得る事を提案しました。

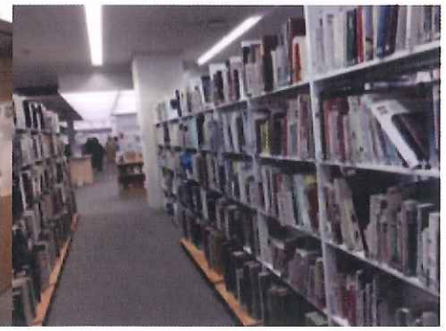
委員会からは、認知症の人であっても気楽に図書館が利用でき、楽しく本が読め、ご本人、ご家族が認知症の情報収集や相談が気軽にできる居場所づくりとして「図書館」の活用を試みてみよう！と話がまとまり、日向市大王谷コミュニティセンターの図書館の一角をお借りして、認知症コーナーを設置させてもらいました。

以下、日向市で取り組んでいる認知症の人にやさしい図書館の概要です。

＊＊＊

京都市最大の図書館
右京中央図書館

右京中央図書館は、地下鉄東西線太秦天神川駅すぐの市街地再開発施設「サンサ右京・3階」に老朽化の進んでいた右京図書館を移転・拡充し、平成20年6月30日に開館しました。本の他、CDやDVDなどの視聴覚資料も充実しており、京都市図書館では最大の図書館です。1日に2千人超の利用者があり、約5千冊の図書が貸し出しされています。これも京都市で一番の規模となります。そんな右京中央図書館の様子を取材させていただきました。



開館前に待ち人あり

毎朝九時三十分の開館前には図書館の入口に三十名ほどの人が待っておられます。午前中は男性の利用客が多いとのこと。朝刊を読むことが日課のようです。

図書館内には、畳敷きのエリアや読書室など、読書スペースが多く設けられており、来館された皆さんは、銘銘に様々なところで過ごされているのが印象的です。特に屋外テラスにある読書スペースは緑が目に新鮮で、心地よく読書が楽しめる場となっています。勝手なイメージで図書館に閉塞感を感じているところがありましたが、開放的な場があることで、ホッとする気分になりました。様々な工夫が見られ、来館者に優しい印象を与えます。

右京中央図書館では、こういったゆったりとしたスペースだけではなく、京都に関する資料など、多くの貴重な蔵書があるため、調べものをする人々の来館も多くあります。そのため、調べ物をするスペースが充実していたり、電子メディアゾーンを備えていたりします。調べ物をするため、訪れる来館者が職員の方に問い合わせされるケースもあります。そういったことにも関連する資料を一緒に調べてくださるなど丁寧な対応をされます。私も、デイサービスのご利用者と「西院」の歴史を調べに行った時には親身に相談に乗っていただきました。

地域との連携を大切に

地域のボランティアさんの力を活かした取組もされています。その一つが乳幼児を対象とした「赤ちゃんからのおたのしみ会」です。毎回三十名以上のお子さんと親御さんの参加があります。また、小学校からの要請で職員さんが学校に赴き、子ども達に本を楽しく紹介する「ブックトーク」の取組もされています。

毎日来館される方の姿が見えない日には、〝どうされたのかな〟など、気にかけることもあるそうです。

毎月、特集コーナーが設けられ、訪問した時には、介護のことを特集し、関連する本が集められていました。高齢者の方が読みやすいように大活字本のコーナーや拡大読書機もあり、高齢者にもやさしい工夫がされています。

このように、右京中央図書館は、地域の方の憩いの場であり、知識を得る場であり、交流の場でもあり、多くの方にとって、地域になくてはならない居場所となっています。

『多世代交流食堂』×『読み聞かせ』

西院デイサービスでは、毎月第三金曜日の17：00から『おいでやす食堂』を開催している。『おいでやす食堂』とは、子供から大人そしてお年寄りまで、年齢や男女問わず地域の方に集まってもらい食事をすることで、人と人が繋がれる場にしていきたいという目的で、地域のボランティアの方や施設職員そして京都光華女子大学の学生さんがメンバーとなり開催されている。

「おいでやす食堂」

毎月カレーとサラダ、そして学生さんが作るベビーカステラなどがふるまわれている。ありがたいことに150人近くの地域の方が来所し、毎度カレーなどは完売している。子供たちが来てくれるか不安だったスタッフも、児童館や保育園・幼稚園にポスターやチラシ配り宣伝させて頂いたおかげで大盛況。子供たちがおいしそうにおかわりをしたり、笑顔でお母さんや友達と会話をしている子供たちの姿をみるとスタッフの顔にも自然と笑顔が生まれ、私たち自身も食堂を一緒に楽しんでいる。

また子供たちが楽しめる場として、地域で活動されている西院小学校PTAの読み聞かせサークル「もぐもぐ」も参加してくださり、『読み聞かせ』を披露してくれている。遊びながら聞いている子達や親に甘えながら聞いている子達。おやつを食べながら聞いている子たちに真剣な表情で聞いている子たち。しかし物語が進むにつれて食い入るように聞いてくれていた。話の内容に合わせて体を動かす場面もあり、子供たちを飽きさせないような工夫がされている。その後も、読み聞かせの場を共に過ごした子供たちを中心に、知り合いの子もそうでない子も一緒に飛行機を飛ばしたり、オセロをしたり、折り紙をしたりと交流のきっかけになっている。

『読み聞かせ』サークル「もぐもぐ」

『おいでやす食堂』で読み聞かせをしているサークル「もぐもぐ」は、西院小学校の保護者の作った読み聞かせサークルである。誕生のきっかけは、子供の本の活動をしていた鈴木さんに西院小・中学校運営協議会が設立された、子供の読書支援を行ってもらえないかと依頼があり、サークル活動が始まったそうだ。

現在の活動としては、小学校・中学校に朝の10分間読み聞かせ活動を中心に、様々な年間行事を行なっている。始めた当初は、中学生への読み聞かせは、聞いてくれているのかどうか分からない状況で、サークルメンバーも悩んだこともあったそうだ。しかし顔を合わせることが増えてきたことで、読み聞かせの時間以外でも、少しずつ会話する機会が多くなり、本当は、読み聞かせに興味を持ち、とてもよく聞いてくれていたことに、気づいたそうだ。今では本の話をする生徒たちも出てきて読み聞かせの時間も、熱心に聞いてくれているとのこと。

サークル活動のどんなところが魅力なのか聞くと、「やはり子供たちが好き。そして本も好き、ということが今までサークル活動を頑張ってこれた一番の理由だと思う」との答えが返ってきた。子供と本を読むことが好きな人たちが集まって始めた活動が、今までになかった地域の人と子供たちの関わりを深め、子供を見る目や子供たちの現状を知ろうとする意識を持つ大人が育つことになったのだ。

私たちが『おいでやす食堂』を始めたきっかけも第一に、中心となる河本所長はじめスタッフが人と関わることが大好き。喜んでもらえることをするのが大好きということが根本にあったからだ。私たちは『おいでやす食堂』を通して、施設と地域の方が、また地域の方同士が、男女や世代を問わず交流できる場を作ることで、そこから福祉への関心や理解が少しでも進めばと考えている。

なお『おいでやす食堂』は毎月第3金曜日の17：00に開催されていますので、みなさん遠慮なくお越しください。子供から大人、お年寄りまでみんなが一緒に楽しめる時間にしていきたいと思っています。

このはな文庫

皆さんは、子どもたちを対象とした文庫を自分のお家でしている方をご存知でしょうか？
今回は、右京区の西院で文庫をしている鈴木さんにお話を伺いました。

子ども文庫に興味をもたれた方は、京都市子ども文庫連絡会にお問い合わせ下さい。

このはな文庫　毎週木曜 14 ～ 17 時（冬期は 16：45 まで）。
kyotoshikorenn@yahoo.co.jp

このはな文庫とは

子ども文庫や地域文庫の活動を鈴木さんが知ったのが約12年前。実際にこのはな文庫が生まれたのは２０１５年12月。鈴木さんが自宅の一室を開放、毎週木曜の午後になれば、自然に子どもやお母さんが集まってくる。本棚には、絵本・漫画や単行本など子どもから大人まで楽しめる本がずらりと揃っている。その場で読んだり、借りて帰ったり、本は読まずにおしゃべりしたり。

月１回はお楽しみ会を開催。一つの本の題材に、その本の内容に関連したおやつを作ったり、工作をしたり、物語の内容にさらに興味を持ってもらえたらと。

また、「なかなか家で出来ないことも出来れば」と。夏はひまわりの種を植え、その成長を観察して楽しんだり、蝶々の青虫を見つけてそれを観察ケース入れて蝶々になるまで観察したりもしています。文庫にある本を開けながら、本での情報と、実際の観察で知り得たことを学ぶことも出来る。

子どもの居場所としてだけではなく

「来ている子どもの居場所みたいな感じになってもいいかな」と思っていた鈴木さん。

今の小学生は忙しく、そして、それぞれの事情を抱えている。子どもたちが来る目的は様々であり、ふっと空いた時間に来る子、ここを友達同士の待ち合わせにしている子、親が仕事で家に一人でいる子、忙しい中慌てて本だけを借りにくる子、小さい妹のために本を借りていく子。そして、なんとなくここに居たいだけの子。そんな子とは、一緒に本を読んだり、なにか興味を持ったことを一緒にしたり、カルタやお絵描きをしたり、学校の話題のお話をしたり。

来るのは子どもだけに限らない。子育て中の親御さんも来られ、お母さんたちが集まると、子育ての話が中心に、お母さんたちの井戸端会議の場にもなっている。文庫の開いていない日には、小学校のＰＴＡ読み聞かせサークル（鈴木さんを中心に10年前に立ち上げられた）の打ち合わせをしたり、本好きの大人が集まったりということにも使われています。

子ども×本×大人

「子どもの時に、本の中でいろいろな疑似体験をしてきたことが、人生の中で役に立ってきた。登場人物やストーリーから学んだことに支えてもらえるように感じたから、今の子どもたちにも、私が感じたことを体験してもらえたらいいなと。絵本は、お母さんやお父さんが子どもに読んであげてほしい。親子のふれあいの時間をもつためのツールのひとつだと思ってもらえたらいいですね。読んでもらうと耳から入ってくる言葉と、目で見る絵とで、お話しのイメージがより豊かに広がります。子どもに親御さんが本を読んであげている様子を見るはすごくうれしいです。そこには、子どもの笑顔があります。大人も怒りながら本を読むことは出来ないですからね」。

「本は面白いんですよ。本を介して子どもと大人が繋がったり、ＰＴＡの読み聞かせサークルが出来たり、地域の児童館と繋がったり、こうやって大人同士も不思議なもんで、すごく繋がっていくんですよ。こういった繋がりがうれしい」。（そうそう私たち西院デイサービスセンターとも繋がりましたもんね）そんな風に、人と本との関係を楽しそうに話される言葉は尽きません。

今回の取材中にも子どもたちがやって来て、鈴木さんと子どもたち様子を見て、鈴木さんの子どもたちを受け入れる優しいお人柄や、本のもつ力を伝えたいという強い思い、子どもたちの笑顔や様子から、安心して思い思いにひとときを過ごしているのを感じ取ることが出来ました。このはな文庫は、地域の素敵な居場所になっていると感じました。鈴木さんは、来る人それぞれに話しかけながら、その時々の状況にあった本を紹介してくださいます。是非一度、気軽にこのはな文庫へ足を運んでみてはいかがでしょうか。

月に一度だけ開く、フリーペーパーの本屋さん『只本屋』

フリーペーパーと言えば駅やコンビニに置いてあり、何気なく取って読んでしまうという事がよくあると思います。そんなフリーペーパーだけを扱っている本屋さんが京都にある事を皆さんご存知でしょうか？そのお店は毎月末土日だけ清水寺のお膝元、東山五条にあるお店です。どういうお店なのか取材に伺い代表の山田毅さんにお話を聞かせていただきました。

只本屋がうまれたきっかけは？

只本屋を運営しているのは学生さんが主体。元々それぞれの大学でフリーペーパーを作っていた学生さんが関西のフリーペーパーを作る団体が集まるイベントで知り合い、お互い交流できるイベントが一回で終わってしまうのは残念。続けていけるものにならないかと考えたのがきっかけで、2年前の3月に『只本屋』がオープンしたそうです。スタートメンバーは代表をされている山田代表を含め6人。みんなそれぞれ違う大学の学生さん達です。

なぜフリーペーパー？

もともとは自分たちが作った物を見てもらうおうと思ったことがきっかけです。そこには作り手の気持ちが表れています。今までは「作ったら終わり」「それで満足」で終っていました。でもそれでは読み手の反応が分からない。作られた本が置いているだけではもったいないと思い、本屋という形にしました。これなら人が来てどんな様子で手に取っているのかよくわかります。お客さんとのやりとりで新しい視点が生まれたり、次のヒントを貰えたりすることもあります。客層も20代や30代の方が多くインターネットが普及しているなか、紙媒体を新鮮に捉えてくれたり、年配の方では自分達が作っていたという方や、こんなものもあるよと紹介してくれる人までいます。フリーペーパーを通していろいろな人との交流が生まれています。

なぜ、月末の土日だけなの？

学生主体ということもあり、サークルやアルバイト勉強等も楽しみながら無理なく続けていくにはどうすればと良いか話し合い、学生さんたちの休日である土・日、しかも月に一度だけ開くという事になったとのこと。

以前から学生と一緒にフリーペーパーを作ってきた山田代表。学生さんの相談を受けて一緒に只本屋をオープンすることとなった

一つのルール

自由に持って帰れるのは8冊まで。それ以上は紙袋を購入すること。紙袋購入後は自由に本を持って帰ることができます。その理由は、好きなだけ持って帰っても良いとなると内容をあまり見ずに手に取ってしまいます。そんな風に取ってしまった本はあまり心にも届かず、読まずに捨ててしまわれることもあると思います。本当はフリーペーパーも本屋で売っている雑誌と変わらない内容のものも多いです。それを読まずに捨てられてしまうのは残念なので、自分達でしっかり選んで手に取って欲しい、という思いから8冊以上は紙袋を購入するという事になりました。

紙袋も3か月に一度デザイナーが変わり新しいものが出来るそうです。紙袋を目的に来られる方もいるとの事

「フリーペーパーの魅力とは？」

本との出会いは一期一会。出会いを楽しんでほしいと思います。自分が興味ある世界だけでなく、自分が知らなかった世界、外の世界の事を知る方ができることが魅力です。目的以外の知らなかったことを知ることができる事がすごく面白いとおもいます。

「今後の展望・野望は？」

これからも頑張り過ぎず、続けていきたいです。ゆるゆるとできるものがあればそれが楽しい。楽しむことを大事にしていきたいです。無理をしてがんばったら、続かなくなってしまいます。メンバーも頑張りすぎて、嫌にならないように、自分がブレーキ役になりながら長く続けていきたいと思っています。

今回のテーマが『本』×『居場所』、あなたが感じる、考える『本』×『居場所』とは？

本という存在が好きなんだと思います。読むこととか内容だけでなく、自分にとって存在そのものが魅力的。紙が織りなし本というものを作っているのが楽しい。本が生活の一部であり、そこにあるという事が私にとっては大切なんだろうなと思います。

山田代表のお話を聞いて、フリーペーパーも奥が深いと感じました。紙そのものの手触りや香り、そして自分の興味のある事や知らなかったことを教えてくれる本は私たちの生活の一部なのかもしれません。そのことを少し気にしながら本を手に取ると今までとちょっとだけ違った読み方ができるかもしれませんよ。

『只本屋』は、東山五条にあり、近くには清水寺や三十三間堂や京都国立博物館など観光名所も沢山あります。ぜひ京都観光のついでに立ち寄ってみては如何でしょうか。

往　復　書　簡

今回、西院デイサービスの利用者である由里 喜美子様と地域包括支援センター西院の谷口センター長に往復書簡をお願いしました。絵と文字との交流、そこに込められたそれぞれの「想い」を想像して、御一読ください。

谷口先生様

谷口様より美しい絵葉書を頂きました。私が今日迄生きてきた中で一番うれしかった事を一つだけ書いてくださいと言われました。考えに考えた挙句、三年程昔にさかのぼり、橋立中学のクラス会のことを思い出していました。私は旧姓楠田喜美子です。長い間出会ってもいない同級生のSさん（マチユリンと云うあだ名です）が私に抱きついて云う事。「キミちゃん、私は女だのにアンタの事が大好きで忘れられへんのかなー」と懐かしい丹後弁で云うのです。私は何もこわい者なしで育ちましたので「へー、ハー」と返していました。マチユリンは女の子何も悪い事はしていません。三人の男の子がマチユリンを叩いて叩いて大泣きするまで止めません。先ほども云いましたが、こわい者なしの私です。三人の男の子を並べて私の腕がどれほど痛むのか分からないまゝにパンパン。男の子たちはどんな顔をして私にたたかれていたのか。余程痛かったんだなーと今になってよく分かりました。あれからマチユリンは二度とたたかれる事はありません。

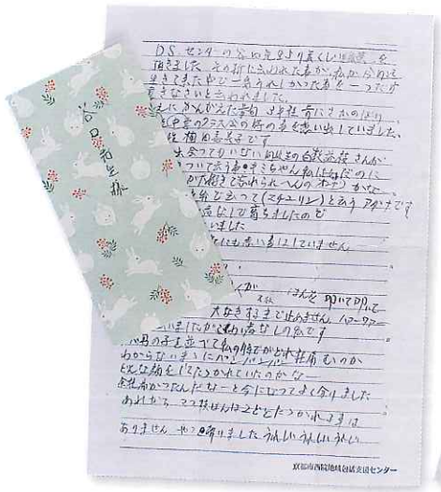
「思い出の本屋さん」

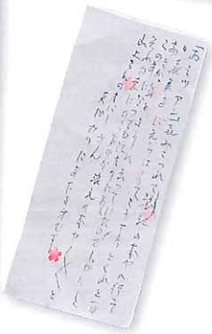
私が三才頃のことです。私は岩滝町の金持ち嘉蔵の孫として生を受けました。乳母のみつ様が我が子のように可愛がって育ててくれました。母はちりめん屋の奥様で大勢の関係者の立ち入りがあり大変忙しくて私どころではなかったのでしょう。

父が「おい、おみっつあん。喜美子を連れて浪江の本屋に行って、本を選ばしてきてくれ、漫画はアカン」と云って、私は毎日のように浪江の本屋に連れて行ってもらったことが、頭にしっかりと残っています。

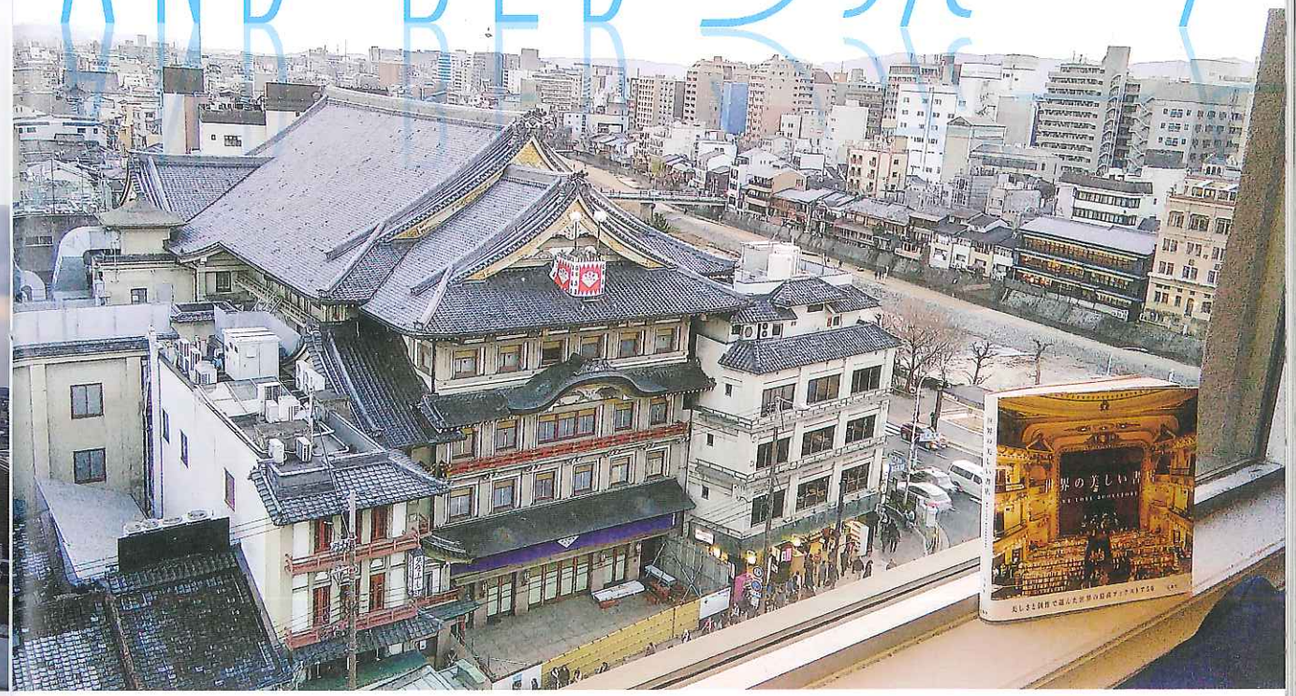
その「浪江の本屋さん」のことを西院デイの職員さんにお話しした所、偶然にもその職員さんの知り合いの方の本屋さんだったのです。これが私の本屋さんにまつわる思い出です。

由里喜美子





BOOK AND BED レポート



平成二七年十一月に東京、平成二八年十二月に京都は祇園にオープンした、知る人ぞ知る話題のスポットへ行ってみました！

そこは観光客や地元の人で賑わう四条通に近いとあるビル。最上階にあるとのことで、エレベーターから降りて見渡すも目立つ看板はなく・・・。フロアにひとつしかないドアを恐る恐る開けると・・・薄暗い中に受付があり、後ろの棚には外国産と思しきビールの数々。カウンター上にはコーヒーメーカーとおしゃれな雰囲気。そして、イケメンの青年が！

久々にドキドキしながら、イケメンスタッフのお兄さんに説明を受け、受付を済ませ、いざ、店内へ。

明るい室内の三方に大きな窓。窓の下にはソファ。長方形の室内の真ん中に大きな本棚。本棚の周りを取り囲むように通路が。「ワタシのお部屋はドコ?あ、あった。う、は、梯子?上段なのね。」と呟きつつ、手荷物と上着を置いたところに同行者から着いたとメールがあり、出迎えに。そう、ココは本を読みながらお泊りもできるというプチホテル（民宿?）。コンセプトは「泊まれる本屋」ただし、買えません（笑）。素泊まりのみ。シャワー・トイレは共用。電気ポット・電子レンジ、ドライヤーは借りられます。受付で、ビールやコーヒーは注文可能。

眼下に南座や鴨川、遠くに京都タワーや東山の風景を望む絶好のロケーション。

本棚の中には本・本・本。

お泊り用個室はなんと本棚の中（青いカーテンの奥）！

本棚には京都一条寺の老舗書店が幅広い分野からセレクトした三千冊の本が。小説・写真集・絵本にコミックとジャンルは様々。これまで読んだことのなかった、新たな本と出会えそうな予感も。

どうですか？　興味が湧いてきませんか?中には京都ならではの本も。詳しくはBOOK AND BED KYOUTOホームページみてくださいね。

BOOK AND BEDのスタッフさんによれば、やはり旅行者の利用が多く、年齢層は様々。中には外国の方も。そういえば、洋書も置いてました。意外に、地元の方もいらっしゃるんだとか。さすがにお泊りの方は少ないようですが・・・。日常からひとときき離れて自分だけの空間をエンジョイしに来られるのかもですね～。個人スペースに本を何冊も持ち込んで、本を読みつつ寝落ちするあの至福の瞬間を味わうつもりだったのに、横になって、いくらもたたないうちに睡魔に襲われ・・・でも、まぁ朝は早めに起きて、本二冊読めたし、今度は昼間に来てみてもいいなと思うワタシ。

お泊りの予約は、ホームページから。当日でも空いていれば泊まれるんだそうです。午後一時～午後五時はデイタイム利用もOK。支払いはクレジットカードか交通系ICカードのみで、現金は使えませんのでご注意。

社長
インタビュー

株式会社 大垣書店
代表取締役 大垣 守弘様に、インタビュー致しました！

今回は京都で書店を営まれている 株式会社大垣書店 代表取締役　大垣 守弘様に
インタビューをさせていただきました。

インタビュー参加者
大垣社長、
河本所長、田端、森脇

〈河本所長〉：お忙しい中、ありがとうございます。よろしくお願いします。

〈社長様〉：よろしくお願いします。

「大垣書店」の理念、運営方針とは？

〈社長様〉：私たちは本を通じて社会に貢献というか役に立つ会社にしようと社是をといています。商売として、本を売って利益を得てはいるのですが、やっぱり書店としての意義をしっかりと理解して、本というものの大切さをみなさんにお伝えしていきたいと思っています。子供さんであれば、自分の生き方とか、将来の夢をもってもらえるような本を提供できたらと思っています。最近は書店の数がものすごく減って、多いときは２４０００件ほどありましたけど、今１４０００件弱になってきています。まちの書店が減って、これを我々が拠点となって何とかしたいなと思っています。本をいつでも買いに行けるようにしたいなと。身近なところで本が買えるというのは、大事かなと思っています。そうゆう意味で、まずは地元の方々にきっちりと本を提供することに注力しています。

〈河本所長〉：そうですよね。大垣書店さんすごく増えていますよね。

〈社長様〉：そうですね。最近は駅やいろいろな商業施設などに出店しています。今、書店の数は減っていますが、以前はすごく本が売れていたのです。本を置いといたら売れていました。それがちょうど僕が継いだ後から出版不況で、そのころから携帯やパソコンなどが普及してきましたから、字を読むことが減って、それに無料で読めるものもたくさんでてきていますしね。わざわざ本を買うことをしなくなっていってしまった。本を読むのってけっこうしんどいですからね。集中しないといけないから。

〈河本所長〉：そうですね。根気がいりますね。

〈社長様〉：今、よく言われていますのが本を読む人と読まない人の差がすごくあるということです。本を読む冊数と年収が比例しているといわれています。よりよい人生を送っていただくために本を読んで、いろんな知識を得ていただきたいです。今はインターネットとかでどこでも本は買える時代ですけど、本に触れない、本屋に行かない人がすごく増え

てきて、最近本も買ったことがない人も増えてきています。そんな方にただ来てもらうのではなく、来たくなるような仕掛け作り、店作りをして本を好きになってくれる人を増やしたいなと思っています。そんな方針でいます。

〈河本所長〉：たしかにインターネットで簡単に検索できますもんね。

創業に至る経緯、社長の当時の想いや継承していくことへの想いとは？

〈社長様〉：大垣書店というのは私の祖父が始めました。もともとは他の商売をやっていたのですが、別の方がやられていたのを引き継いだというこことです。もともとは西陣の方で染物屋をしていたらしいですが、縁あって書店を始めたようです。北大路バスターミナルが以前は市電の車庫になっていて、その車庫の前で、5坪ぐらいで祖父母二人でやっているようなお店で始めていたみたいです。僕が大学4回生になる歳に地下鉄ができて、急に忙しくなって、僕も就職活動の時期だったので、店の手伝いをしていたまま今にいたっています。なにも分からないままきたのでとても苦労しました（笑）

〈河本所長〉：そうしたら社長様がここまで大きくされたのですか？

〈社長様〉：一人じゃないですが、弟もいたし、父親も店を増やしたりしていました。しかし、売れる本が仕入れられない。田舎の本屋には実績がないと出版社は本を売ってくれない。なんで仕入れられないのか、あちこち聞きに行きましたね。聞いているうちにもっと売り上げを増やしなさいとか、そうしたら送ってあげるとか、もっと店を増やしたらなど言われました。どうしたらお客さんに満足いく店づくりができるかなと、お客さんに教えてもらいながらしていました。そうやって売り方を研究していました。

〈河本所長〉：そうなのですね。すごいですね。一から、聞いてまわられて。

〈社長様〉：これからが大変ですね。本屋が無くなるのではないかという危機感があります。本当なら店を閉めて貸したほうが儲かるといわれているぐらいです（笑）小売業はそれほど厳しいです。

「大垣書店」として考える地域の居場所とは？

〈社長様〉：本の好きな人に集まってもらいたいと思っています。以前は店内でよくサイン会をしていたのですが、サイン会はその作家さんのことを好きな人しか来られないので、新しい読者が増えない。今は、売り場のスペースがあるところでは作家さんに来てもらってトークイベントとか、作家さんとコミュニケーションをとってもらって、興味をもってもらえたらいいなと思っています。ギャラリーなどで絵描きさんが展示をしていたり、そこでコーヒーを出していたら、初めて来てもらった方でも会話が生まれたりする。何も無いところに人が集まっても会話にはならないでしょうから。猫の展覧会なら猫の好きな人が来ますから、ちょっとしたきっかけ作りになればいいなと思っています。最近の店舗にはカフェのコーナーを作っています。我々もお店になんとか足を運んでもらいたいので、集いの場を作りたいと考えています。そこでなんらかのコミュニケーションが生まれたらいいなと思っています。我々としては本を語る場が作れたらいいなと思っています。

〈河本所長〉：本好きの方はたまらないですね。

〈河本所長〉：最近、まちの図書館に高齢者の方が行かれることが多く、本を好まれる高齢者の方が多いことを知りました。「認知症にやさしい図書館」という取り組みがあるくらいです。認知症の方への対応など、福祉施設と連携できることがないかという動きもあります。

〈社長様〉：認知症の方が絵本などを見て、昔の記憶が蘇ったりすると聞きますね。脳を活性化するのって字を読んだり書いたりすることでしょ。子供さんに対してもうちの社員が本を読んで教えたりして、そういう事も我々の仕事かなと思っています。まずは売り場に来てもらって興味を持ってもらうことが望ましいですね。左京区の高野のほうでカフェをやっていますが、近所の人が来られており、年配の方も来

ておられます。静かな場所なので話しづらいかもしれないけど（笑）。

〈河本所長〉：カフェスペースがあると人が集まりやすいですね。外に出るという楽しみにもなりますしね。

〈社長様〉：やっぱり人間ひとりでは寂しいですよね。自分だったら、一人だとろくなことにならないと思います。ひとりでご飯も食べられないです（笑）みんなも嫌なんじゃないかと思います。

社長にとっての居場所とは？

〈社長様〉：一番聞かれたくないですね（笑）

〈河本所長〉：一番聞かれたくないですか（笑）

〈社長様〉：とりあえず、あまり家にいないですね。

〈河本所長〉：海外にも出張に行かれていて忙しいですよね。

〈社長様〉：今は本店4階のギャラリーの奥でラジオ放送局をしています。コミュニティラジオ放送局ですね。地域の情報発信をしています。地元の地域団体の方や消防の方に出てもらって活動を発表してもらっています。

〈河本所長〉：そんな活動をされているのですね。

〈社長様〉：アナウンサーとかは学生さんを中心に地域と学生のコミュニケーションの場としての目的と、地域の情報発信と緊急時対応として消防や警察と連携しています。熊本や東北でも災害の後は、コミュニティ放送局を作っているようです。ラジオだったら地域だけの情報を発信できますからね。テレビだと広範囲になるので。北区には大学が4つあるのでそれぞれ学生さんに分担してやってもらっています。大学生でマスコミに行きたい人に練習としてボランティアで来てもらっています。そうだ！よかったら番組を作ってもらったらいいじゃないですか？

〈河本所長〉：いいのですか。やってみたい！

〈社長様〉：学生さん達は、本当にいきいきとしてやっています。自分で番組を作りますからね。

〈河本所長〉：ラジオは、学生さんが多く聞かれているのですか？

〈社長様〉：それが地域FMなのでデータでは分からないんです。

〈河本所長〉：学生さんに福祉や介護の仕事の魅力を伝えたいという思いがあって…。介護現場の人材不足が深刻なんです。

〈社長様〉：そうですよね。大変なお仕事ですよね。そんな簡単に急には広がらないですが、何か福祉の魅力を伝えてもらえたらいいですね。若い人はいろんなことを知る事が大事ですよね。若い頃は自分の知っている事がすごく狭いって分からないですものね。

〈河本所長〉：コミュニティラジオは社長様が考えられたのですか？

〈社長様〉：私が考えたわけではないです（笑）今、日本でブームみたいです。寺町の三条ラジオカフェとかね。

〈社長様〉：もし高齢者の方などでラジオで話したい方があれば出てもらったらいいですよ

〈河本所長〉：ぜひお願いします！

急なお願いにもかかわらず、快くインタビューをお受けいただき、ありがとうございました。大垣社長の本への思いや、熱意、またコミュニティラジオといった取り組みを聞かせていただき、河本所長、職員ともども大変勉強になりました。西院デイサービス、welcome やまの家もご利用者、地域に向けて貢献していければと思います。ありがとうございました。

発行年月日：平成29年11月12日

発行：高齢者福祉施設　西院　　http://www.saiin-essassa.com

〒615-0001
京都市右京区西院上今田町 18-3
電話番号：075-812-6711（京都市西院老人デイサービスセンター）
075-812-6722（居宅介護支援事業所京都福祉サービス協会 西院）
075-812-6712（高齢サポート・西院（地域包括支援センター））

〒615-0093 京都市右京区山ノ内宮前町 5-10
電話番号：075-813-5680（地域密着型サービスセンター Welcome やまの家）